

中国现代文学选集

19

诗——郭沫若 闻一多 戴望舒 卞之琳 何其芳 李金发 穆旦 冯至 艾蕪 卞之琳 何其芳 李金发 穆旦 冯至 艾蕪

卞之琳

卞之琳

卞之琳

卞之琳

卞之琳

平凡社

中国現代文学選集 19 詩・民謡集 中野重治・今村与志雄編

郭沫若 聞一多 臧克家 田間

秋吉久紀夫 訳

袁水拍 艾青 李季 馮至 蕭

飯塚 朗 訳

三 聞捷 卞之琳 李広田 他

今村与志雄 訳

斎藤 秋男 訳

須田 禎一 訳

千田 九一 訳

中国現代文学選集
全 20 卷

詩・民謡集

第10回配本・第19巻

昭和37年11月5日 初版発行 ©

定価 450 円

訳者との申合
せにより検印
を省略します

訳者代表 ^{いまむらよし} 今村与志雄^{*}

東京都千代田区四番町4番地
発行者 下中邦彦
東京都板橋区志村町1丁目1番地

目 次

詩

郭沫若

電燈の輝くなかで

バイカル湖畔の蘇武

ミレーの「羊飼いの女」

ベートーヴェンの肖像

大砲の教訓

上海の印象

西湖紀遊

上海・杭州間の車中で

三 三 四 五 七 八

雷峰塔の下で

趙公祠のほとり

三潭印月

雨の湖を亭上より望む

春の女神の歌

洪水時代

月下のスフィンクス

黄海中の哀歌

冬枯れ

白い鷗

さようなら日本

九 一〇 一一 一二 一三 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一八

まっ黒な活字の穴蔵で

赤光のなかで逢おう

巢を失った雀

恢 復

黄河と揚子江の対話

民族復活の祝砲

罪惡のピラミッド

陶行知を悼む

駱 駝

牡 丹

宗白華

わが心

田 漢

嵐のあとの春の朝

成仿吾

詩人の恋の歌

三

二

三

三

四

七

六

元

三

三

四

三

三

三

七

陶晶孫

絶 壁

穆木天

水の音

馮乃超

残 燭

劉 復

大 風

落 葉

パリの秋の色

小 詩

無慈悲な寒さと餓え

涙 よ

ベルリン

夢

母

元

三

三

三

三

七

七

七

七

七

四

四

記憶	101	待つ二	101
希望	101	空が晴れたなら	105
あの深い深い黒海……	103	妻に贈る	106
戴望舒		蕭紅墓畔即吟	106
枯葉の唄	104	偶成	107
雨の巷	105	臧克家	
指	106	難民	108
私の記憶	107	くるまひき	109
路上のささやき	109	生命の叫び	109
秋	109	広場の夏の夜	110
散歩	110	七首のうた	111
夜歩きする人	110	鞭	111
白い蝶	111	人民とはなんだろう	113
獄中の壁に題す	111	生命の零度	113
僕は傷ついた手掌で	113	海	116
待つ一	113	むすめとわかももの	117

卞之琳

帰る

さびしさ

物売り

断章

鴉の群

黄昏

薄暮

寒夜

新秋

酸梅湯

何其芳

秋

夢

土塀

酔え

三六

三六

三六

三六

三六

三六

三六

三六

三六

三六

三六

三六

三六

三六

三六

成都よ お前をおこしてやる

夜の歌(一)

夜の歌(二)

夜の歌(三)

河

私は少年少女のために歌う

生活はなんと広いものだろう

幾度かわたしは日常生活を離れた

歌 声

楊吉甫に贈る

賢良江

李広田

老人と海

入浴

古い煙草入に題す

袁水拍

一七

一六

一五

一四

一四

一四

一四

一五

一五

一五

一五

一五

一五

一五

揺れる	一六
今日、着換えた洗い立てのシャツ	一六
都会	一六
床屋	一六
哀悼	一六
無題	一六
だが	一六
釘	一七
牛の角に坐った蠅	一六
ロルカ殉難十周年祭	一六
輓歌	一七
『馬凡陀の唄』から	一七
春の歌	一七
「わが信条告白」	一七
陶行知	一七
鋤のうた	一七

詩人	一七
まだ多くない	一七
艾蕓	一七
秋	一七
太陽	一七
生命	一七
石炭との対話	一七
波	一七
雪は中国の大地に降る	一七
手押し車	一七
夕暮れ	一七
わたしはこの土地が好きだ	一七
乞食	一七
冬の沼	一七
樹	一七
力揚	一七

霧季詩抄	
道	一五〇
燈	一五〇
短い歌	一五〇
蒲風	
運転手	一五二
田間	
戦士へ	一五二
自由よ、ほくらを目指してやって来い	二〇三
もしおれたちが戦わねば	二〇三
義勇兵	二〇三
飼育係へ	二〇三
防衛戦	二〇三
ひと粒でも多く、	二〇四
堅壁	二〇五
やなぎの樹	二〇五

鹿	二〇六
ラッパ	二〇七
青春のうた	二〇八
吡拉瑪朝	二一〇
科学者	二一二
邵子南	
詩人へ	二一五
春・穀物の詩章	二一五
方冰	
歌声	二二七
残った壁に書く	二二七
徐明	
遊撃隊員	二二九
除夕	二三〇
街頭詩	二三〇
慰問	二三〇

民 主	三〇	賀敬之	
たねまき	三一	葬 式	三六
錢丹輝		嚴 辰	
夜 柿の林を過ぐ	三三	送別二章	三六
史 輪		阿 拉 川	三二
事 務	三三	朝	三四
陳 輝		李 季	
献詩——エデンの園のために	三四	われらの油田	三四
娘	三五	紅いスカーフ	三四
家におかえり	三六	いまはあんずの花咲く二月	三九
簫を吹く人	三七	白 楊 河	三〇
糕 売 り	三八	店での問答	三二
母親と子供	三九	陽 関 大 道	三三
祖国の歌	三九	三すじの清らかな小河が流れている	三五
魏 巍		嘉峪関を出ると	三四
戸を叩く	三四	西 へ ！	三五

張志民

愛

山村即景

夜の笛

行商人

戈壁舟

魯迅先生と一人の労働者

楠の林

あなたの仕事部屋の外に

聞捷

序詩

「博斯騰湖の畔」より

道案内

はるかな眺め

獺師

願い

三六

三五

三三

三六

三五

三五

二六

二六

二六

二六

二六

「吐魯番の恋の歌」より

林檎の樹のした

夜鶯は飛んでいった

葡萄が熟れて

ぼくに言ってくれ

瓜を植える少女

「菓子溝の唄」より

河岸

追求

少女

旅人

蘆芒

母の名

嚴陣

水汲み

梁上泉

三六

三六

三六

三〇

三二

三三

三三

三三

三三

三七

二〇

橘子が色づいた	二八三
小さな銀杏の木	二八三
歴史の嵐	二八三
夜光の珠	二八四
李 旭	
岩 石	二八五
『抒情小曲』より	
娘	二八五
春ははじめにどこに来る	二八六
ティプジャン・エリイヴ	
――へ	二八七
思 慕	二八七
きりのない歌	二八八
ラブジエパムザン	
母	二八九
わたしは金色の魚になり	二八九

恋歌三首	
想 い	二九一
願 い	二九二
戒 め	二九三
民謡	
ア シ マ	二九五
中国詩年表	三五一
解 説	四〇〇

詩

秋吉久紀夫 訳

飯塚朗 訳

今村与志雄 訳

斎藤秋男 訳

須田禎一 訳

郭沫若

須田 禎一 訳

電燈の輝くなかで

一 バイカル湖畔の蘇武

電燈があかるくついたのに

どうして私の心はこんなに暗いのだろう、

ひとり街をそぞろあるく私の胸に

バイカル湖畔の蘇子卿の姿が浮んでくる。

白い羊の皮ごろもをまとい

柔毛の沓 柔毛の裳 柔毛の頭巾

蒼茫かぎりないシベリアの荒野に立つ彼、

その背後には雪の潮のような羊の大群。

おそらくは春浅き日のたそがれどき

佗び住居へもどろろとする姿だろう、

背景をなすはバイカル湖の氷の波

また大空の白い雲とつらなる山なみ。

おそらくは東へとあゆみながら

のびあがつて南の空を望んでいるのだろう、

限りない悲しみのたたえられた双眸には

ひとすじの希望が燃えつづけているようだ。

二 ミレーの「羊飼いの女」

電燈があかるくついたのに

どうして私の心はこんなに暗いのだろう、

故郷を慕う蘇子卿の姿を胸に浮べながら

私は街頭の美術書舗へ入った。

まず四林湖畔の夕暮の絵をながめ

またカリフォルニアの瀑布の絵をながめ――